

烏森トレッキング回想記

第十九回

日 程：5 / 3 1 (土) ~ 6 / 1 (日)

行 程：5月31日(土)

野上駅—埼玉伝統工芸会館—美の山—宝登山神社 宿 / 民宿やなぎや

6月1日(日)

—宿—ケーブル駅—宝登山(497m)—宝登山神社—長瀨ライン下り—岩
畳

メンバー：米本、吉川、小林、磯崎

行き先を初めて埼玉県とし、奥多摩の北部丘陵地、奥武蔵を選ぶ。

天気予報は週初めから芳しくないばかりか、日々傘マークを掲げ、留めは前日女将からの電話、“明日の秩父は雨です”。

雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ！

今回は山田氏と森氏が欠席し、米本氏はおおみや市での社行事参加のため夕刻からの合流となる。雨足が強くなったり弱くなったりする中、先発精鋭3名が秩父鉄道 / 野上駅に向かう。

先着は小林氏、何とワゴン車を乗り付けての参加は前代未聞。間なく下り電車が到着し、吉川氏も姿を現わす。

【余談53】 今回の待合せ場所 / 野上駅は秩父鉄道の途中駅で、JR熊谷駅、西武鉄道秩父駅、東武鉄道寄居駅経由の3コースを案内。時間を選ぶか、コストを選ぶか、それとも車窓風景を選ぶか、中々決め難いと思ったが、結論は解り易いコースが選ばれたようである。

メンバーがワゴン車に乗り込むと、直ちに発進。予定の長瀨アルプスには鼻っから登る気はなく、下調べをしたと云う和紙のふるさと、小川町「埼玉伝統工芸会館」に車は向かうも、何ら異議は出ず。

会館に到着した頃には雨も小降りになり、周囲の風景もやや明るさを増す。

和風造りの建物は比較的新しく、広い敷地内には、道の駅「おがわまち」を併設。9時半からの開館に、早、何組かの来館者の姿を見掛け、道の駅の効果を知る。

300円の入場料を支払い入館。

手工芸品と切絵を楽しんだ後、いよいよ紙漉きに挑戦。花葉入り1枚紙の制作を選び、女性係員の助けを借りながら厚手の和紙を漉く、吉川、小林両氏はハガキ大8枚組に挑戦、1週間後に郵送してくれると云う結果や如何。

途中、米本氏から電話が入り、今なお横浜に在宅し、これからこちらに向かう由、**本日の行事は雨で中止になったとのことであるが、“中止は昨日の内に決まっていたのでは”と、誰かが呟く。**

【余談54】今回初めて和紙を漉く体験機会を得た。次なる目標として、木工加工、陶磁器制作、炭焼き、蕎麦打ち等にも挑戦していきたい。

昼食地は長瀬の南、車で登れる美の山（叢山 587m）をターゲットにし、国道140号線を再び戻る。何とも機動力に溢れるが、これで良いものであろうか。

山頂近くに車を止め、雨を避けて展示館内のベンチに食卓を作る。今回初めてウインナー炒めを披露するが、食欲衰えるところがなく、いたって好評。小川町駅前コンビニで購入した弁当とカップ・ヌードル・ビッグで昼食。

食後のコーヒーを楽しみ、後から駆け付けた団体さんにベンチを譲り、“ごゆっくり”と云いながら堂々立ち去る。

周囲を包む紫陽花が雨に濡れて何とも鮮やか。

宝登山神社境内に車を止め、玉砂利を踏みながら、雨も厭わずしばし散策。ロープウェイ駅にも足を伸ばし、奥武蔵の春夏境目を十二分に満喫する。

若干、早目ではあるが、神社近くの「民宿 やなぎや」に入る。

かつての手広い営業を窺わずかの様に、店頭ウインドーには雉他鳥獣の剥製が飾られ、広い土間には大きな木テーブルが据えられる。

奥の方から、体の不自由な亭主まで顔を出してくれて、老夫婦で大歓迎。

頂戴したコピー資料によると、同氏は30年も運送業を経営していた他、12代も続くハンター一族で、国鳥である雉の保護に尽力した由、当店で雉肉が提供できるのは山に放した後の残鳥処理を任されているためとのこと。

お茶を供され、秩父の話を聞きながら、しばし休息。

途中で米本氏が合流し、時間を見計らい階上に上る。

夕餉は女将の独演会。

秩父は武甲山（1,295m 日本200名山）の醜い山肌に表象されるように、かつてはセメント産業が栄えた地であるが、現在は同業も他所に移り、もう一方の観光産業は、

皮肉ではあるが、交通の利便化が日帰り旅行を可能にし、旅館業には厳しい営業環境下にあるとのこと。

女将の話術は巧みであるが、余りの長さにどうにも辟易、話を聞き流すようにビールを飲み乾し、視線を外す。

とは云え同女は善女、予約時、“近くに交番があるが、あんた等大丈夫だよ”とユーモア一杯、前日の架電は、“悪天候に中止になるのを心配して”、と正直な心根を吐露する。

部屋に戻り、焼酎による2次会開始。回を重ねる毎に、酒量が落ちるのは止むなしか。

翌朝は一転、太陽と青空が顔を出し、好天満々。

早朝、長瀬駅まで下駄を鳴らして歩き、かつての賑わい振りに想いを馳せると、駅周辺には面影十分、併記された旅館名の3店に消去線が引かれているのを目撃する。

旨い朝食を平らげ、“いざ宝登山に登らん”とリュックを背負うや、厚誼に感謝と女将からワインの差し入れ、有り難く頂戴する。

出発！清々しい朝の参道を悠々と進み、途中、“御帰り時には是非ご利用下さい”と、うどん屋のお姉さんからサービス券を貰い、“昼食に、「流し素麺」何ぞは如何”と別の店を指さす。

参道途中を左に折れ、急坂を上ってケーブル駅へ。

作戦通り、9：40分発の始発ケーブル・カーに乗車。

山頂駅は要塞にも似て、周りをコンクリート壁で囲まれる。南面に、石灰掘削のため山肌を削られた武甲山を探すが、葉の茂った樹々が視界を遮る。

それにしても、ケーブル・カーにそんなに収容能力があったかと思うほど、若い家族連れ等、人が多く、頭を混乱させていると、前方の広い登山道から汗を拭き拭き登って来る人多数有り、彼ら以上の重装備である我が身を振り返りながら、つい苦笑い。

梅園の道から山頂を目指し、額には、早、緊張の汗。

急坂続きの山道を踏破し、途中、奥の院に足を延ばす。火を焚く女官に挨拶し、かつて日本武尊を火災から救ったと云う狼像の頭を撫でる。頂上は近いぞ！

山麓からは徒歩50分、山頂駅からは同8分の山頂に到着。

疎林に囲まれ、静寂に包まれた山頂からは南面に展望が開け、前方左手には独立峰武甲山が痛々しい山肌を見せる。

心地良い涼風を受けながら、据えられたベンチで、しばし休憩。

何故か、ここまで訪れる人は少なく、望遠鏡を操作する人、持参した小椅子に腰掛けて絵筆を握る人等、数名の姿を散見する程度で、妙な対照。

右手前方の樹間から登山者が姿を見せ、当初予定した長瀨アルプスからの縦走者かとその周辺に眼を凝らすも、標識らしきものは見当たらず。

コーヒー何ぞをとと思うが、眼の前に立つ、「火器使用厳禁」看板が睨むため、移動を決める。

少し下ると、「奥の院」への道を分ける尾根路脇に大きな石板を見つけて荷を降ろす。早速、湯を沸かしていると、**後ろの方で、自信たっぷりに道案内するメンバーの声、“こっちは山頂へ、あっちは奥の院行きだ、遠回りになっちまうが、山頂にも行けるよ”。**

コーヒーと紅茶を楽しみ、しばし歓談。

ケーブル・カーを降り、宝登神社廻りで参道を下る。

昼食「流し素麺」は店内テーブルを回転しての小仕掛けなものであることが判明したのと、時間が早いこともあり見送り。

米本氏が昨日立ち寄ったと云う、旧新井家住宅と郷土資料館を訪ねる。

館の南側に広がる1万㎡の花苑口に多くの人々が集まり、何の言葉も発することなく静かに見入る姿、視線の先には可憐な「ハナビシソウ」の花が風にそよいでおり、我がメンバーもしばし佇む。

次なるプログラムは今回のメインイベントのひとつ、「長瀨ライン下り」。

乗船時間約30分の HALF コース (3 km) を選び、13:00 発の専用バスに乗車し、出発点の親鼻橋に向かう。

乗船場は荒れた河原に設けられ、何とも興がなし。

先に下船するため、後から乗船するよう指示され、船首側左舷に座るが、これは幸運、迫力に恵まれ、喜びはしゃいで水除けビニール・シートを肩に掲げる。

漕ぎ手は二人、ガイド役を兼ねる若手が船首を、ベテランが船尾を担当するが、実質的には後者のコントロール下にあったと後で聞く。

前日の雨に水嵩が増し、予想外のハイスピード、本日の HALF コースは所要時間約20分と案内され、途中、急流コースを回避し、人工路を迂回しながら進む。

溪谷は深く切り立つ岩壁が印象的であるが、ガイドの説明では、大雨時、かなりの高さまで水深が昇ると云い、所々に残るその形跡を指し示す。

それでも、ここでも樹々は岩の隙間に根を張り、生命力に溢れる逞しさを披歴、見事な水墨画の世界を醸し出す。

岩壁がやや低い左岸には、どうやって辿り着いたのかが気になる多くの太公望の姿、持ち場を守り高所から糸を垂れる。

驚いたのは、三脚セットして岩上で待ち構えるカメラマン、写真は後日郵送すると云うが、我がメンバーに申し込む人はなし。

駅の東手、岩畳近くの間差点で下船。

人で混み合う土産店の通りを抜け、駅近くの蕎麦屋に入り昼食。初夏の汗ばみに、笹そばに人気が集まる。

食後、再び岩畳に向かい散歩を楽しむ。岩場の大きさは誠に立派であるが、歩き難さ、ゴミ捨てによる汚れは半端でなく、「彩の国 埼玉」は何処にと嘆く。

車を駐車している「やなぎや」に戻り、帰途に向かう。

途中、東武東上線／小川町駅で降ろしてもらい、メンバーに別れを告げる。